

豪華な装いや美貌は エレガンスの本質に非ず



ちくまプリマー新書
価格1,034円(税込)
ISBN978-4-480-68556-8

エレガンスの語源は 「選ぴとる」

本書のテーマである「エレガンス」を辞書で引くと、「上品」「優雅」「洗練」といった語が並ぶ。広告では、「エレガント」という形容詞で商品の上質さが表現されること

『エレガンス入門』 中野香織 著

profile 中野香織(なかの・かおり) ラグジュアリー文化の専門家として著述・講演・教育・企業アドバイザーなどに携わる。東京大学大学院修了。英ケンブリッジ大学客員研究員を経て、明治大学特任教授、青山学院大学客員教授などを歴任。2022年経済産業省「ファッションの未来研究会」委員。著書に『イノベーター』で読むアパレル全史』などがある。

も多い。しかしこの言葉は本来、そのような表層的な印象を示すためのものではないのだという。西欧社会におけるラグジュアリー文化の形成過程に詳しい著者の中野香織氏は、「装いと空間」「言葉と振る舞い」などの観点から企業の表現戦略を支援している。本

書はそんな同氏が、表面上の美しさを表す表現として単純化されがちな「エレガンス」という概念の本質を詳述。私たちがその概念を「世界とどう関わるか」という知性や倫理の判断技法として捉え直すために編まれた一冊だ。

エレガンスは、「選ぴとる」を意味するラテン語の *eligere* (エリゲレ) を語源とする。我々は日々、「何を語り、何を明かさないか」「どこまで競い、どこで譲るか」など、無数の選択を重ねながら暮らしている。局面ごとに真摯な判断を心掛けた結果として体现されるのがエレガンスであり、最善の選択をする努力を積み重ねた人の行動や佇まいが、他者の目に「上品」「優雅」「洗練」と映るのだ。

エレガンスとは、美しいファッションや宝石、完璧な所作で人生を飾るための装置ではない。むしろ、エレガンスは、自分と他者、個人と社会、欲望と節度、自由と責任といった、複雑に絡み合う関係を、できるかぎり穏やかに、しかし誠実に調整して

いくための「技法」です。

エレガンスは歴史的に、暴力と距離をとるための知恵として育まれてきたという。その萌芽の一つとなったのが古代ローマの議会で、政敵を力で倒すよりも、フォーマルな言辞で追い詰めるやり方のほうが高等だとされた。とはいえ中世までの欧州の貴族は、怒ればすぐに剣を抜くのが常だった。

だが、近世に至り国家の統制力が強まると、私的な暴力が制限されるようになる。かつてのフランスでは決闘が盛んだったが、一七世紀半ばに始まったルイ一四世の治世下では、宮廷の舞踏会に招待される頻度や、王の前での立ち位置などが競われるようになった。名誉や体面を保つ手段が、「剣の強さ」から「振る舞いの美しさ」へと置き換わったのだ。

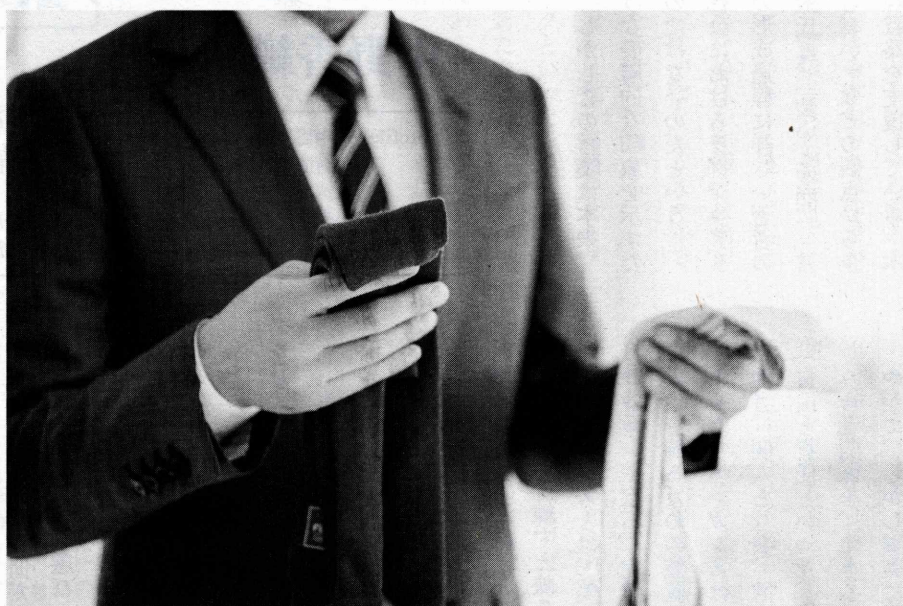
ココ・シャネルが確立した 新たなエレガンス

直接的な暴力に訴えない美学は、一七世紀にパリで花開いたサロン

文化に受け継がれる。そこでは機知に富んだ話し方がエレガントと称賛され、感情をむき出しにして相手を罵るのは無作法と軽蔑された。古代ローマ以降、エレガンスはもっぱら暴力を交換し抑制する装置として機能してきたのである。

その構造が大きな転換点を迎えたのは、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてだ。既存の身分秩序が揺らぎ、匿名性の高い近代都市が成立すると、人々は自分の属性をファッションで表現し始め、それと同時にエレガンスの意味も変容。例えば富裕層は、自らが生産階級に属さないことを誇示するべく、実用性の低い高価な服や装飾品を身に着け、それがエレガンスとみなされるようになった。

やがて上流階級のみならず生産階級の女性までもが、労働とは無縁な華奢な体を演出するため、ウエストを強く締めつけるコルセットを着用する流行が定着。その流れに革命を起こしたのが、フランスのファッションデザイナー、ココ・シャネルだ。彼女は、女性が



自らの選択を積み重ねた人の行動や佇まいが、他者の目に「上品」と映る（写真はイメージ）

真に美しいのは自然体でいるときだとして、体の動きを制限するコルセットや丈の長すぎるスカートを否定。柔らかな素材の服や、両手が自由になるバッグなどを次々

に生み出して支持を得た。

こうした新しい服は、女性自身が自分の人生や行動様式を選ぶための自己表現と解放の象徴となりました。ここでのエレガ

ンスは、他者のために自分を犠牲にすることではなく、自分の

身体と生活を出発点としながら、

他者にとっても快いフォームを

探る営みです。

他方、科学の世界では、本質を

明快に表す簡潔な理論がエレガ

ンスと称えられるようになる。エレ

ガンスは、「世界を捉えるための思

考のフォーム」ともなったのだ。

古くから培われてきた上品な所

作としてのエレガンスは、帝国主

義の台頭とともに欧州以外にも拡

大した。列強諸国が植民地を支配

する際、「西洋人と同じように振る

舞う人間」を大量生産するための

基準として利用されたからである。

SNSやAI全盛の時代に問われる姿勢とは

二〇世紀に入ると、日々の食事

の在り方やファッションなどに関

する「上品」「洗練」の基準は、

上流階層ではなく雑誌などのメデ

ィア産業が定めるようになった。

それにつれて一人ひとりの消費行

動は、「必要なものを買うこと」

から「アイデンティティの選択」

へと変質。エレガンスは自由な選

択の結果であるように見えながら、

実はメディアが用意した選択肢の

中で成立するものと化した。

二一世紀になると、今度はメデ

ィア産業に代わり、SNSがエレ

ガンスの尺度をつくるプラットフォーム

となる。誰もが発信者・批評

者になれることで、エレガンス

の「編集権」は分散した。この変

化は民主化と呼べる反面、「炎上」

を招くリスクともなう。だから

こそ「選りとり」というエレガ

ンスの語源に立ち返り、自分がどの

文化の文脈に立ち、どの価値観を

引き受けるかを熟慮することの大

切さが増していると著者は言う。

このような時代に求められる

のは、視線に晒されながらもな

お、どう振る舞うかを選び続け

る、知性と倫理のかたちなのだ。

す。

AIが高度に発達してからは、

ますますその重要性が高まってい

る。AIはありとあらゆる分野に

関する膨大な情報を処理し、瞬時

に合理的に見える解を提示するが、

絶対に差し出してはくれないもの

があるという。

それは、「引き受けること」で

す。どの選択が誰を傷つけるか。

どの決断が、どんな未来をつく

るのか。その帰結に、どんな責

任を負うのか。

決断によってもたらされる結果

の責任を背負うのは個々の人間で

あり、その判断から降りない姿勢

を保ち続けることが、これからの

時代の「エレガンス」の一つの在

り方なのだ。本書は主張する。

AI時代のエレガンスは 自らの確かな判断を下すための 最良の技法ともなり得る

著者からの
メッセージ



中野香織

エレガンスとは、
自分の意志で選りとること

富も容貌も、エレガンスには関係ありません。語源はラテン語の「選りとり」。エレガンスとは、自分一人で完結する美ではなく、相手や社会との関係の中に生まれる心地よさのことです。情報が溢れ、選択肢が氾濫する時代。選りとる力は、そのまま人や組織を動かす影響力になります。本書は思想・美学・科学・実践の側面からエレガンスを解き明かしました。決断を担う方にこそ読んでほしい一冊です。